

廃棄軌道の シャンデリア

【真空に晒された死のシャンデリア】

【感度だけが残された壊れた美少女たち】

【ただの部品としてリサイクルされる】

【オルガフロンティア】シリーズ

生体ユニット・機械姦・快楽落ち・尊厳破壊

本格ディストピア生体インフラ・ハードSF

著：XYZ_L

廃棄軌道のシャンデリア



女の子を生体ユニットにして使い潰しちゃう系
ディストピア・ハードSF・宇宙インフラモノ
「オルガ・フロンティア」シリーズ

著:XYZ_L

1.肉の自販機

中継ステーション『錆びた錨（ラスティ・アンカー）』の最下層区画。

ここはステーションの循環システムから完全に見放された吹き溜まりだった。

重力制御ユニットの不調により、足元には常に泥沼を踏み抜くような微弱な浮遊感が付きまとう。

空気は重く澁み、配管から漏れ出す酸化したオイルの臭気、労働者たちの作業服に染み付いた安価な合成ムスク、そして饅えた汗の臭いは何層にも重なって漂っていた。

壁を這う太い動力パイプは動脈瘤のように赤黒く膨れ上がり、時折、苦しげな蒸気音と共に白煙を吐き出しては薄暗い視界をさらに濁らせている。

ゲイルは整備用ハッチを潜り抜け、重い磁力ブーツのソールを歪んだデッキプレートに叩きつけるようにして歩いた。

小惑星帯でのデブリ回収作業は、連続三日間に及んでいた。

神経を極限まで削り取る船外活動の連続に、肉体はとうに限界を迎えている。

作業服の繊維の奥深くまで金属粉が食い込み、乳酸の溜まりきった筋肉は鉛のように重い。

だが、過剰摂取したカフェイン錠剤と、いつ気密破れを起こすか分からない死の緊張感が神経の先端を逆撫でし続け、脳の芯だけが異様な熱を帯びて冴え渡っていた。



このまま狭小な自室のベッドに倒れ込んだところで、耳鳴りに苛まれて眠れないことは目に見えている。

「.....スイッチを切らなきゃな」

強制的なシャットダウンが必要だった。

ゲイルは居住ブロックへは戻らず、薄暗い通路の最奥へと足を向けた。

歩みを進める彼の耳に、壁の奥から低く唸るようなジェネレーターの駆動音が響いてくる。

聖暦2030年代に人類が重力の井戸を這い出して以来、四半世紀。

この錆びついたステーションの空調から宇宙船の推進機関に至るまで、すべての動力は「オルガパルス」によって賄われていた。

女性の生体が絶頂の極限においてのみ、子宮頸部深奥に存在する『聖杯体』から発振させる特異生体エネルギー。

壁の端子として生きたまま埋め込まれて使い潰されるか、あるいは巨大プラントの培養槽で肉体の原型を失うまで搾り取られるか。

それが、この世界において生殖機能を備えた「資源」に割り当てられた絶対的な運命だった。

ピンク色のネオン管が不規則に明滅を繰り返し、ジジジと虫の羽音に似たノイズを撒き散らしている一角。

そこには公衆便所のように無機質な個室が並んでいた。

「リフレッシュ・ブース」。

この荒みきったステーションにおける最も安価な娯楽設備であり、同時に下層の生命維持電力を支える末端インフラだ。

空室を示す緑のインジケーターを確認し、ゲイルは分厚い防音扉を押し開けた。

内部は人間が一人ようやく立てる程度の狭さしかない。

壁面は汚れが目立たない灰色の樹脂パネルで覆われているが、所々には変色した体液の染みや、歴代の客が爪を立てて引っ掻いた無数の傷跡が刻まれていた。

ゲイルは手慣れた動作で、壁面の決済端末にIDタグをかざす。

『50 ES（エコー・シェル）』。

配給される粗悪な合成肉定食の二回分。

決して安い端金ではないが、上層の娼館で生身の女を買うよりは遥かに手軽で、煩わしい会話が存在しない。

冷たい電子音と共にロックが解除され、正面の壁面パネルがブシューッという重い油圧音を響かせてスライドした。

奥の窪みに、一人の女が「設置」されていた。

彼女からは人間としての尊厳も自由も完全に剥奪されている。

頭部から上半身は壁面ユニットの内部に完全に密閉され、壁から突き出しているのは腰から下の肉体のみ。

まるで最初からステーションの建材として設計された生体部品のようにだった。

死人のように白い肌が、人工照明の下で脂ぎって鈍く光っている。

突き出された臀部の下、左右の足首には簡素な金属製の足かせが嵌められ、壁面の固定バーに繋がれて暴れるのを防いでいた。

股間には高粘度の工業用潤滑ジェルが過剰なほど注ぎ込まれ、赤黒い生身の秘裂はだらしなく口を開けている。

そのすぐ上のアナルもまた、度重なる客の侵入によって締めりを失い、ヒクヒクと不揃いに痙攣を繰り返していた。



二つの淫穴からは、注入された冷却ジェルと前の客たちが残っていた精液が混ざり合い、どちらも判別のつかない白濁したドロドロの液体となって、白い太ももを伝って絶え間なく垂れ落ちている。

壁面の簡易モニタには、内部に埋設された生体ユニットの管理ステータスが無機質に明滅していた。

視覚と聴覚を遮断する頭部センサーバイザーの同期完了。

そして無駄な絶叫によるエネルギーロスを防ぎ、酸素と流動食を二十四時間強制注入し続ける「消音ギャグ型マウント・プラグ」の給仕圧正常。

壁の奥からは、その太い口枷に押し殺された女のくぐもった呼気と、低く掠れた呻きが微かに漏れ聞こえていた。

(.....ランクCか。今日はハズレだな)

ゲイルは冷めた視線でその汚れた肉塊を値踏みした。

太ももの内側には、かつて軍の管理下にあったことを示す識別バーコードのタトゥーと、薬剤投与を繰り返された青黒い注射痕が痛々しく残っている。

最前線で消耗品として使い潰された元・下級歩兵か、あるいは闇市場の競りで値がつかずに払い下げられた成れの果てだろう。

だが、今のゲイルにとって贅沢を言える余地はない。

彼は無言のまま作業用ズボンのベルトを緩め、下着ごと硬直した己の欲望を露出させた。

作業服の金属粉と汗の匂いが、充満する合成ムスクやジェルの鼻を突く化学臭、そして混濁した体液の生臭さと混ざり合い、密室の空気をひどく不快に濁らせる。

ゲイルは腰を落とし、白濁液で濡れそぼる生身の割れ目へと己のモノを一気に押し込んだ。

ぬちゃり、と泡立つような生々しい水音が密室に響く。

温かく吸い付くような粘膜の感触が、瞬時に彼の肉を包み込んだ。

外周を固定する金属の冷酷な硬度とは裏腹に、薬物によって強制充血させられた内部粘膜は、異常なほどの高熱を帯びている。

機械的な外観に反して、生身の締め付けは驚くほど貪欲で執拗だった。

これは精巧な人工物などではなく、生きている筋肉の生々しい収縮反応だ。

恐怖と神経刺激薬によって調教された無条件反射。

客のピストン運動による激しい物理衝撃が、子宮口に密着固定されたペッサリーリング型のオルガ・プローブを突き叩き、子宮頸部深奥の聖杯体を狂ったように共鳴させる。

励起された高次元の生体パルスは、客の腰振りを一切妨げない陰核部の小型端子を経由し、壁面の生体ケーブルを通じてステーションの蓄電グリッドへと相転移されていく。

すべては、女の肉体からエネルギーを極限まで搾り取るために最適化された設計だった。

「……ふうッ、く……ッ」

ゲイルは短く熱い呼気を漏らしながら、片手で彼女の冷たい尻肉を乱暴に驚掴みにした。

指先をめり込ませて柔らかい肉を歪ませ、もう片方の手の指を、白濁液にまみれて痙攣するアナルへと押し当てて弄ぶ。

緩みきった肛門の縁を指先で抉るように撫で回すと、粘液とジェルの混ざり合うぐちゅぐちゅとした水音が卑猥に弾けた。

彼が後ろから腰を打ち付けるたび、壁面に固定された女の肉体がショックアブソーバーの軋みと共に前後に揺れる。

足首の足かせが固定バーと擦れ合い、ジャラリと冷たい金属音を立てた。

陰核部の接続端子が過熱して微かに焦げたオゾンの臭いを放ち、ステーションの予備バッテリーへと直結した壁の生体ケーブルが、パルス変換の負荷に応じて脈打つようにカチカチと狂った明滅を繰り返した。

「……はぁっ、く……ッ！」

ゲイルは骨盤の骨が浮き出た彼女の腰を両手で乱暴に掴み直し、体内に蓄積した疲労の毒素と神経の苛立ちをすべて吐き出すように、無心で機械的に腰を打ち付けた。

壁の奥から、口枷に遮られたくぐもった悲鳴が反響して伝わってくる。

「う……ぐう……っ♥」

激しい衝突の衝撃が骨盤を通じて伝わるたび、太いマウント・プラグが喉奥深くまで押し込まれ、呼吸を乱暴に奪っていく。

子宮口のプローブが激しく突き叩かれるたび、薬物によって狂わされた神経系が激しい肉体の収縮を引き起こし、彼女が背徳の法悦に呑み込まれていく様を生々しく伝えていた。

「んむううッ……ひいいッ……♥♥」

それが侵入に対する本能的な拒絶なのか、それとも狂わされた雌の歓喜なのか。

ゲイルにとって知ったことではなかった。

この場所に「人格」など介在しない。

存在するのは乾いた需要と、生体リソースのエネルギー変換効率だけだ。

絶頂は唐突に訪れた。

ゲイルは彼女の最奥に嵌まるプローブへと己を強く突き刺し、限界まで腰を押し付けた。

ドピュッ、ドピュルルッ……！

脈動と共に、濃密で熱い飛沫が子宮口の受容面へと激しく叩きつけられる。

同時に、限界まで過負荷をかけられた彼女の聖杯体が激しく共鳴し、突き出された腰が弓なりに跳ね上がった。

陰核部の端子から放たれたオルガパルスが青白いスパークとなってケーブルを駆け抜け、ステーションの蓄電インジケーターを一気に跳ね上げる。

「あ……く……ッ」

数秒間の激しい痙攣の後、ゲイルは濁った呼気を吐き出しながら、ゆっくりと腰を引いた。

ズブッ、と結合が外れる卑猥な音に伴い、新たに吐き出された白濁液が溢れ出し、白く冷えた太ももを伝って垂れ落ちようとする。

だが、その液体が床を汚すことは許されない。

突き出された股間の真下、骨盤固定フレームの下部に組み込まれた漏斗状の回収ドレンポートに備わる光学センサーが、滴り落ちる余剰体液の漏出を瞬時に検知した。

シュゴォ……。

無機質なバキューム音が密室に響き渡り、ドレンポートの強力な吸引圧が、溢れ出た白濁液ごと秘部とアナルの周辺を瞬時に吸い上げていく。

間髪容れずに吹き付けられた温風と殺菌ミストが、濡れた粘膜と皮膚を即座に乾燥させた。

この過酷な宇宙では、射精された精液さえも貴重なタンパク源であり、あるいは新たなエコーズ素材を培養するための触媒リソースとして徹底的に回収・再利用されるのだ。

『有機リソースの回収を完了。エネルギー変換率、最大効率を記録』

感情を完全に削ぎ落としたステーション管理AIの無機質な合成音声が、冷たくブース内に響き渡った。

ゲイルがズボンを引き上げ、ベルトを締め直す頃には、正面のスライドパネルは油圧音と共に再び音もなく閉ざされていた。

彼女は冷たい闇の奥で自動洗浄を受け、濃厚な栄養剤を静脈に注入されながら、次の客が訪れるまでシステムのスリープモードへと落とされるのだろう。

頭蓋の奥を満たしていた焦燥と熱が引き、ずっしりとした鉛のような倦怠感が心地よい重みとなって全身を包み込む。

ようやく、張り詰めていた脳のスイッチが切れた。

「.....あとは、寝るだけだ」

ゲイルは気だるげにブースの防音扉を押し開けると、重い磁力ブーツを引きずるような足取りで自室の安ベッドへと向かった。

これでようやく、泥のような深い眠りに落ちることができる。

2.星の墓場へ

翌朝。

安宿の硬いベッドで目を覚ましたゲイルは、合成粉末のコーヒーを喉に流し込みながら携帯端末のログを確認した。

昨夜、泥のように眠っている間に自動巡回させていた広域センサーが「ある信号」を拾っていたのだ。

『廃棄軌道セクター9にて微弱信号。識別コード照合.....連合軍・戦略通信衛星、タイプ・ヘリオス』

ゲイルの目が完全に覚めた。

ヘリオス型。

大戦中期に運用された巨大衛星だ。

軍事機密の塊であり、何よりその巨体を動かすために「特大のバッテリー」を積んでいることで知られている。

通常ならとっくに回収されているはずだが、運良くデブリの影に隠れて生き延びていたらしい。

「.....上玉だ。早起きした甲斐があったな」

昨夜の安価な「処理」のおかげで体調は万全だった。

他のハイエナ共に嗅ぎつけられる前に、誰よりも早くあの宝の山へたどり着かねばならない。

ゲイルは作業用ジャケットを羽織り直すと、愛機が待つハンガーへと足早に向かった。

◇

ゲイルの愛機『スカベンジャー・V』は、旧連合軍の強襲揚陸艇を無理やり作業用に改造したつぎはぎだらけの小型艇だ。

装甲はデブリの傷だらけで塗装も剥げ落ち、配線が各所で剥き出しになっているが、エンジンとセンサーだけは最新のものに換装してある。

コクピットに滑り込み、慣れた手つきでシステムを起動した。

『リアクター、オンライン。……生体同期完了。出力安定』

無機質な合成音声と共にホログラムディスプレイが展開される。

この船の動力源もまた、一人の女性だった。

座席の真下、分厚い鉛の隔壁で遮断された「炉心室」には、かつてどこかの戦場で拾ったオルガユニット——連合のハウンドに搭載されていた、脳を焼かれ生体部品と化した名もなき女性が眠っている。

彼女が見続ける凄惨な悪夢と極上の快楽の「夢」が、子宮深奥の聖杯体を激しく共鳴させ、この船を推し進める暴力的な推力へと変換されていた。

「行くぞ。座標セット、ポイント・オメガ」

スラスターが耳を劈くような唸りを上げ、船はステーションの重力圏を離脱した。

目指すは「廃棄軌道（グレイブヤード・オービット）」。

そこは役目を終えた軍事衛星、破壊された艦船の残骸、そして行き場を失ったゴミたちが吹き溜まる宇宙の墓場だ。

通常の航路からは外れ、正規軍のパトロールも滅多に來ない真空の荒野だった。



数時間の航行の後、窓の外の景色が一変した。

星々の瞬きを遮るように無数の金属片が漂っている。

ねじ切れた装甲板、半分だけになった人型兵器の頭部、中身の凍りついた脱出ポッド。

かつてここで繰り広げられた凄惨な艦隊戦の記憶が、物理的な残骸となって漂っていた。

「.....反応あり。識別信号、連合軍・戦略通信衛星『ヘリオス』型」

センサーがデブリの帯の奥深くに微弱なビーコンを捉えた。

ゲイルは口元を歪めた。

当たりだ。

サーチライトの光芒の先に、その異様なシルエットが浮かび上がった。

全長50mを超える無骨な円筒形の金属塊。

黒いソーラーパネルの翼は折れ曲がり、あちこちに被弾の跡が残っている。

だがゲイルが目を奪われたのはそこではない。

衛星の中央部、メインフレームを取り囲むように設置された放射状の支柱。

そこに8人の裸の女性たちが、整然と張り付けられていた。

「OSG-M1（フレーム・コア）。……『死のシャンデリア』か。いつ見ても趣味が悪い」

ゲイルは独りごちた。

OSG-M1。

それは高価なカプセルや精神管理システムを廃し、女性を裸のまま宇宙空間に晒して発電させる最も非人道的な発電ユニットだ。

彼女たちは「恐怖」と「苦痛」を極上の燃料にする。

ナノマシンの防御膜（ヴォイド・スキン）すら与えられず、ただ死なない程度の加工だけを施されて真空の宇宙へ括り付けられていた。

衛星は姿勢制御を失い、ゆっくりと自転している。

それに合わせて8人の白い肢体も優雅に回っていた。

遠くの恒星の光を受けて、彼女たちの肌が濡れたように艶めかしく輝く。

昨夜処理に使った傷だらけのCクラス個体とは雲泥の差だった。

それは兵器の部品というにはあまりにも美しく、人間と呼ぶにはあまりに静かだった。

「.....外装チェック。真空焼けなし、欠損なし」

ゲイルはモニターを拡大した。

彼女たちの肌は特殊な透明ジェル「バイオ・ラミネート」でコーティングされていた。

薄膜のジェルは体液の沸騰を防ぎつつ、前面から受ける真空の絶対零度と、背面のフレイムから伝わる稼働熱をそのまま肉体へ透過させている。

その極端な寒暖差による終わらない拷問と、足元に広がる虚無への恐怖が脳幹を絶え間なく刺激し、子宮頸部深奥の聖杯体を狂ったように共鳴させて莫大なオルガパルスを生み出し続けるのだ。

逃げ場のない寒冷と激痛に締め上げられた肉体の痙攣は、彼女たちの自律神経から大量の冷や汗を搾り出していた。

それがラミネートの中で真珠の結晶のように瑞々しい輝きを放ち、ガラスケースの中の美術品のような質感を完全に保存している。

だが問題は中身だ。

このタイプのユニットは肉体よりも先に精神の許容量（キャパシティ）が壊れる。

過度の恐怖によって脳の神経レセプターが焼き切れ、刺激に対する不応期に陥れば、発電効率はガタ落ちになり、ただの美しいだけの生体パーツに成り下がる。

自律神経系そのものが停止してしまえば、残されるのはオルガパルスを一欠紡げない、ただの生体ゴミだ。

こいつらが捨てられた理由はなんだ？

衛星自体の故障か、それともバッテリー（彼女たち）の寿命か。

「確かめるしかないか」

ゲイルは作業艇を衛星の回転に合わせて同期させると、マニュアル操作に切り替えた。

リフレッシュ・ブース(通称:バブリック・ボックス)



宇宙フロンティア各地の中継ステーション下層に広く設置された、最底辺の性的・エネルギー回収インフラである。

人権を完全に剥奪されたアセットを壁面に固定し、労働者のストレス排泄処理と微弱電力の回収を同時に行う。

アセットは腰から上を壁内部に格納され、腰から下だけを通路側へ突き出して固定される。

安価な決済でハッチが開き、行為中の微弱な興奮をオルガパルスへ変換してステーション予備電源へ充電する。

口腔の消音・強制呼吸プラグが絶叫を遮断しつつ最低限の酸素と薬液を供給し、効率が失われた個体は引き抜かれて産業用グリスや有機肥料として完全にリサイクルされる。

3.真空の検品

「EVAを行う。……アームじゃ、あの『感度』は分からねえからな」

ゲイルはシートから身を起こし、船外活動用の重装宇宙服を装着した。

ヘルメットを被り、エアロックへと入る。

プシュウウ……という減圧音と共に空気が抜かれ、完全なる静寂が訪れた。

ハッチが開く。

目の前には圧倒的な星空と、冷たく回転する肉のシャンデリアが広がっていた。

ゲイルは命綱（テザー）をフックに掛け、無重力の空間へと飛び出した。

背部スラスターを細かく吹かし、シャンデリアの一部——「3番」の個体へと接近する。

近づくにつれ、その異様さが鮮明になった。

彼女は若かった。

おそらく十代後半から二十代前半。

長く伸びた金色の髪が重力から解き放たれて海草のようにゆらゆらと漂い、後光のように彼女の頭部を飾っている。

整った顔立ちは死人のように蒼白だった。

大きく見開かれた瞳は美しいブルーだが、そこには何も映っていない。

瞬き一つせず、ただ虚空の彼方を見つめている。

焦点の合わないその目は、彼女の精神がとっくの昔に崩壊し、恐怖の絶頂で時間が止まってしまったことを物語っていた。

「.....生きているな」

ゲイルはヘルメットのHUDで対象の生体IDをスキャンした。

『識別信号照合.....軍用通信衛星アセット、M1-NA-704。生体コア・ステータス、アクティブ』

（ネオテラン製の違法加速チップか。.....道理で異常な出力が出るわけだ）

彼女の口には、高濃度酸素と粘膜保湿剤を供給するための太いギャグユニットが、喉の奥まで深々と突き刺さっていた。

絶叫によるエネルギーロスを防ぐと同時に、誤嚥による窒息を完全に遮断するための消音マウントだ。

透明なチューブの中を無色の薬液が規則正しく循環しているのが見える。

口元の隙間から規則正しいリズムで白い呼気が漏れ、真空中の中に一瞬で霧散していった。

心臓は動いている。

肺も機能している。

だがそれだけだ。

彼女は「生きている」のではなく「生かされている」。

視線を胸元へと移すと、十代特有の華奢でたおやかな骨格が、無重力の中で頼りなく浮かんでいた。

手のひらに収まりそうな小ぶりの乳房は、重力から解き放たれて無防備に上を向いている。

真空の絶対零度と極度の緊張によって、薄いラミネートの下にある小ぶりの乳頭は硬くキュッと尖り、痛々しいほど冷たく凍えきっていた。

兵器の部品として使い潰すにはあまりに可憐で、無慈悲な造形だった。

ゲイルは厚いグローブ越しに彼女の太ももに触れた。

バイオ・ラミネート独特のぬるりとした感触。

その下にある肌は宇宙の冷気で陶器のように冷たく硬い。

薄膜のジェルは体液の沸騰を防ぎつつ、前面から受ける真空の絶対零度と、背面のフレイムから伝わる稼働熱をそのまま肉体へ透過させている。

極寒と灼熱の挟撃による終わらない肉体の痙攣と恐怖が、彼女の自律神経から大量の冷や汗を搾り出していた。

それがラミネートの内側で真珠の結晶のように濡れた輝きを放ち、凄惨な拷問の痕跡をガラスケースの中の美術品のように保存しているのだ。

「外装は極上だ。……さて、中身はどうだ？」

ゲイルの視線が彼女の股間へと降りる。

拘束具によって大きく開かれた両脚の間。

そこには大人の手首ほどもある無骨な黒色の「エネルギー抽出プローブ」が、根本まで無慈悲にねじ込まれていた。

連合軍の標準規格であるその極太のチューブは、華奢な少女の体軀にはあまりに過大で、腔腔穹窿部を限界まで押し広げて固定されている。

長期間にわたる過酷な拡張によって粘膜は赤黒く鬱血し、プローブの形状に沿って無理やり馴染まされ、痛々しく腫れ上がっていた。

さらにその先端から伸びた柔軟なカテーテルが、硬く閉ざされた子宮口をすり抜けて最奥の聖杯体へと直結している。

そのすぐ下、臀部の割れ目にもまた、無骨な「直腸ポート（ライフ・アンカー）」が深々と固定されていた。

胃腸を動かさない彼女たちの生命を繋ぐため、高濃度の栄養ジェルを直腸粘膜からダイレクトに微圧注入し、同時に排出される老廃物を分子レベルで瞬時に分解・吸引する全自動の透析ユニットだ。

胃や小腸による消化プロセスを完全に迂回し、代謝のすべてを機械に委ねているからこそ、彼女たちは汚物にまみれることもなく、餓

死もせずに、この極寒の真空中で美しい生体部品として何年も稼働し続けられるのだ。

(.....このタイプは、恐怖で締めりが良くなるように調整されているはずだ)

ゲイルはためらうことなくそのプローブの根本を両手で掴んだ。

そして機械の整備点検のように事務的な手つきで、乱暴にガクガクと揺さぶる。

グリッ、と。

体内の異物が敏感な粘膜を容赦なく挟り、子宮口を強くノックした瞬間――。

ビクンッ！！

真空の無重力空間で、彼女の身体が大きく跳ねた。

声は届かない。

だがギャグで塞がれた喉が引きつり、白い首筋に青い血管がくっきりと浮き上がる。

白目を剥きかけ、足の指先までがピンと強張る様は、彼女の脳髄に強烈な電気信号が走ったことを如実に物語っていた。

HUDのモニターに、彼女の心拍数が跳ね上がる波形が映し出される。

恐怖心拍の急上昇。

それが直後に、ネオテラン製のチップによって強制的なオルガパルスへと変換されていく。

「……ッ、ごふっ……！」

ヘルメットの骨伝導マイクが、彼女の喉奥から漏れた微かな振動音を拾った。

厚いグローブを介して、プローブを押し潰さんばかりに締め上げてくる膣肉の猛烈な脈動がダイレクトに伝わってくる。

「んむうッ……ひいいッ……♡♡」

それは悲鳴にも、狂わされた嬌声にも聞こえた。

心は完全に死んで焼き切れている。

だが物理的な刺激をトリガーとして、高度な演算機能と化した肉体だけが鮮烈に生きている。

数ヶ月、あるいは数年もの間、恐怖と苦痛で極限まで研ぎ澄まされた彼女の神経は、わずかな刺激さえも爆発的な快感へと処理してしまうのだ。

「……感度良好。凄まじい反発力だ」

ゲイルは満足げに頷いた。

プローブと肉の接合部から極上の透明な愛液がじわりと滲み出し、真空に吸い出されて完全な球体となり、ふわりと無重力に浮き上がった。

彼女の大きく見開かれた目から、一筋の涙がこぼれ落ちる。

それはラミネートの膜の中を伝い、陶器のような頬に銀色の筋を描いた。

感情による涙ではない。

ただの生理現象。

壊れた機械がオイルを漏らすのと何ら変わりはない。

『廃棄軌道のシャンデリア』

公式技術仕様書&世界観設定資料集(修正版)

1. 軌道衛星用生体発電システム「OSG-M1(通称:フレーム・コア／死のシャンデリア)」仕様

主機ポート(エネルギー抽出機構)

大人の手首ほどもある無骨な「エネルギー抽出プローブ」が、対象の膣腔穹窿部を限界まで拡張し物理的に固定する。

プローブ内部から伸びた柔軟な極細カテーテルが子宮口をすり抜け、最奥の聖杯体へと直結。

高純度オルガパルスをロスなく抽出する主動カライン。

補機・生命維持ポート(口腔)

強制呼吸・給仕ユニット(リングギャグ型)。

発声を物理的に封じて叫び声を遮断しつつ、液体酸素と高濃度栄養薬液を供給し、生存を維持するためのデバイス。

オルガパルスの抽出機能は持たない。

物理拘束・乳首電極(補助ポート)

脊椎直結型の金属アームフレームによる完全固定。

乳房に貼り付けられた薄型電極パッドが、発電出力低下時に強烈なペナルティ電撃を与え、強制的に恐怖の覚醒状態へ引き戻す。

2. 真空極限環境における生体維持インフラ

バイオ・ラミネート(薄膜ナノシェルコート)

真空による体液の沸騰・蒸発を完全に防止する特殊な極薄ゲル膜。

前面の絶対零度と背面の稼働熱という極端な温度差を遮断せず、そのまま肉体に透過させる。

この寒暖差の挟撃が自律神経に終わらない生理的痙攣を引き起こし、極限のパルス効率を絞り出す。

3. カセット・ドール(Type-I規格・真空パック仕様)

高度な知的資産価値なしと判定された女性たちの末路。

細胞の代謝を不活性休眠状態(人工冬眠)にする特殊な細胞保護ゲルを充填し、皮膚表面を高強度の「感覚遮断ラミネート」で限界まで密着密閉する。

身動きは一切取れないが、肉体は生きたまま機能を維持しており、外部からの電気刺激やプローブの物理振動に対して、ラミネートの膜内で筋肉を痙攣・脈動させて発電する。

半永久保存が可能な最底辺インフラ。

4. 無法港『錆びた錨(ラスティ・アンカー)』の退廃インフラ

リフレッシュ・ブース

ステーション下層の壁面に公衆設備として埋め込まれた性的インフラ。

腰から下だけを無防備に突き出された女性たちが固定されており、労働者たちは端末に50 ESを投入するだけで、人格を完全に剥奪され、薬物と恐怖で条件反射のみを残された「喋らない肉」の股間に直に腰を打ち付け、排泄処理を行うことができる。

5. 違法改造例: ネオテラン製加速チップ搭載個体(識別信号 M1-NA-704)

本来のOSG-M1規格には存在しない、旧ネオテラン製の「違法加速チップ(オーバークロック)」。

最も過敏な感覚同期端子であるクリトリスに埋設された制御チップ(IDタグ)を経由し、脳深部の中枢神経へと直接過電圧をバイパスする構造。

これにより、崩壊した精神回路から規格外の超出力オルガパルスを持続的に叩き出すことが可能。

本編に登場する「3番」個体がこの改造を施されていた例である。

作品名：廃棄軌道のシャンデリア

発行日：2026年8月16日

発行者：XYZ_L

連絡先：<https://bsky.app/profile/xyz0080.bsky.social>

【注意事項】

本作には強度の尊厳破壊、生体部品化、および救いのない結末などの過激な表現が含まれております。フィクションとしてお楽しみいただける方のみご閲覧ください。

【AI生成技術の利用について】

本作の表紙および挿絵などの画像は、AI画像生成技術を利用して出力したものをベースに、加筆修正やレイアウト調整を行って作成しております。

【禁止事項】

本作のテキスト、画像を含む一部または全部の無断転載、複製、改変、Web上への無断アップロード（SNS、動画サイト、ファイル共有サイト等を含む）を固く禁じます。
